

研究報告

白髪一雄の宮崎での足跡

古賀昌美

I. はじめに

宮崎県立美術館では、2022年5月28日から7月3日にかけて特別展「尼崎市コレクション 白髪一雄—行為にこそ総てをかけて—」を開催した。本展は、白髪一雄（1924-2008）の出身地である兵庫県尼崎市が白髪の画業や人物像などを全国に広く発信するため、所蔵作品を積極的に貸し出し、美術館と協働で展覧会を開催する「白髪一雄発信プロジェクト」の一環として開催された。2019年度から始まった「白髪一雄発信プロジェクト」は青森県立美術館、オペラシティアートギャラリー、2020年度に高松市美術館、ファーガス・マカフリー・ギャラリーで開催されている。

「白髪一雄発信プロジェクト」を宮崎県で開催するにあたり、宮崎市出身の作家・藤野忠利（1936-2019）が白髪に師事していたことに注目し、宮崎における白髪の足跡を辿ることにした。白髪と宮崎の関係が先行研究等で語られることはほとんどないが¹、藤野のご遺族の協力により、藤野が遺した展覧会のパンフレット、書簡、メモ、作品など膨大な資料を目の当たりにすることができた。藤野の視点を通して白髪一雄を知ると「ダイナミックで荒々しい作風」「具体の主要メンバー」「戦後日本を代表する抽象画家」としてだけではない、等身大の白髪一雄の姿を垣間見ることができる。本稿は、展覧会では「第三章 宮崎での足跡」において紹介した白髪一雄の宮崎での足跡を中心に、白髪の人物像に迫るものである。

II. 白髪一雄の画業

初めに、白髪一雄の画業を展覧会の章立てに沿って簡単に振り返りたい。

白髪一雄は、1924年兵庫県尼崎市に生まれた。1942年に京都市立絵画専門学校（現・京

¹ 白髪の宮崎での足跡がたどれる資料には、藤野忠利がまとめた『もうひとつの具体』（鉦脈社、2011）及び『gutai faces』（鉦脈社、2018）がある。

都市立芸術大学)の日本画科に進学し、卒業後洋画に転向する。「プロローグ：初期作品」では、この頃に白髪が描いた、地元の尼崎や大阪の風景画を展示した。尼崎の街並みや、大阪の近代的な建築などを写実的に描いているが、徐々に形態がデフォルメされ、新たな表現を模索していく。

白髪は日本画とは対照的な油絵具の粘性や流動感が自分の表現に合っていることを確信する。「第一章：新しい表現を求めて」では、洋画を本格的に学ぶなかで徐々に抽象的で幾何学的な作風となっていく変遷を追うとともに、同時期に取り組んでいた抽象化された裸婦デッサンなどを展示した。白髪が足で描くことの遠因の一つは、あるとき作品を描き損じ、油絵具をパレットナイフでこそぎ落としていたところ、思いがけず現れた流動的な絵具の模様触発されたことである。白髪は絵筆を手放し、パレットナイフを用いて絵具の凹凸がうねるような作品を生み出した。その後、パレットナイフをも手放し、素手で直接絵具を使い、ついにはキャンバスを床に置き、足でキャンバスに踏み込んでいくようになる。

1954年、戦後の関西では吉原治良(1905-1972)をリーダーとして具体美術協会(以下、具体)が結成され、白髪は吉原の誘いを受けて入会した。白髪の表現はロープで自らの身体を自在に操って、絵具の上を滑走し、身体を限界まで酷使する、よりダイナミックな表現に変化していく。「第二章 具体美術協会」では、具体に参加していた時期に制作したアクション・ペインティングの代表作、水滸伝シリーズから《天富星撲天雕》(1963)のほか、視覚にとどまらない身体感覚への関心をうかがわせる《指で強く押してください》(1956)といった作品を展示した。また、具体は野外や舞台にも作品発表の場を展開しており、白髪が制作したパフォーマンス要素の強い実験的な作品について映像や写真資料によって紹介した。1962年には具体の独自の展示施設グタイピナコテカが開館し、開館直後は具体の会員の個展が連続で開かれた。白髪の個展は、嶋本昭三(1928-2013)に続き、2番目に開催されている。

一方、白髪には天台密教に傾倒したもう一つの顔がある。1971年に比叡山延暦寺で得度し、素道そどうという法名を得て、数年にわたる過酷な修行を行った。「第四章 密教との出会い」では、密教を主題に「抽象の仏画」として仏の姿を描いた「密教シリーズ」を展示した。

その後、白髪は再び足で描くようになり、最晩年まで多様なアプローチからアクション・ペインティングを探究していく。「第五章 さらに探究へ」では、単色の作品やあざやかな色彩で描かれたアクション・ペインティングの作品や、水彩画や版画といった油絵具以外の技法にも挑戦した作品などを展示した。

III. 宮崎での足跡

白髪一雄と宮崎の関わりには、作家・藤野忠利の存在を抜きに語ることはできない。藤野忠利は、1936年宮崎市に生まれ、立命館大学経済学部を卒業後、1961年から宮崎交通(株)に務めた。そして1962年にグタイピナコテカで開催された白髪一雄の個展を訪れ、白髪と初対面する。このときの出会いを後に藤野は以下のように回想している。

「この絵をかいたのは、どなたですか」と会場にいた坊主頭の青年にきいたら「私です」と低い謙虚な声が返ってきました。(若々しく青年にみえた)

えのぐのかたまりが宙を走ったかと思われるような300号の大作と「その人」をしばらく見くらべていました。(中略)

あの感激が今でも、ずっと心のなかで燃え続けています。²

当時白髪は38歳。白髪を知る人は、誰に対しても謙虚な人だったと口をそろえるが、初対面の若者にも同様の態度で接していたようである。このような出会いを経て、藤野は白髪を師と仰ぎ、「第15回具体美術展」(1965)「第1回具体新人展」(1968)などに出品、具体の作家たちと親交を深めていく。具体では、1960年代中頃から新人の発掘を目的とした新人展が開催されるが、藤野もそのうちの一人であった。具体の正会員となるには他の会員からの推薦が必要であり、現代っ子センターに残されている書簡によると、白髪は藤野を推薦し正会員となるよう取り計らっていたようである。残念ながら藤野が正会員になる前の1972年に吉原治良が逝去し、具体美術協会は解散した。

一方、宮崎交通(株)で藤野はサポテン公園³や企画宣伝課の仕事に就いていた。当時の社長であり、宮崎観光の父とも呼ばれる岩切章太郎が宮崎の観光業に力を入れ、斬新な企画を求めるなか、藤野は具体の作家を招いた企画を実施していく。

その第1弾の企画として、1968年7月に具体の吉田稔郎が、当時藤野が担当していたサポテン公園で《FOAM-Y》(1968)という作品を展示した。当時吉田は泡を使った作品に取り組んでいたが、本作はサポテンを模した高さ5メートルほどの紺色の角柱から泡が吹き

² 藤野忠利「感激」『白髪一雄』現代っ子センター、1978年6月7日-21日

³ 1937年~2005年、宮崎県日南市の日南海岸にて宮崎交通(株)が運営していた観光施設。

出し続ける大がかりなものである。白髪は作品設置の手伝いのため初めて宮崎を訪れて、吉田と藤野とともに MRT 宮崎放送のテレビ番組「サンデーショー」に出演した (fig.1)。具体の存在を宮崎で広めたいという藤野の狙いもあったのだろう、白髪は宮崎日日新聞 (1968 年 8 月 23 日、資料 1) に、現代美術になじみの少ない当時の宮崎の読者に向けて、平易な言葉で吉田の作品と具体美術協会の紹介する文章を寄稿している。さらに、『芸術九州』3 号 (1968 年 12 月 15 日、資料 2) にも文章を寄せており、宮崎を訪れた印象について「その都会的のムードと文化水準の高い様子を驚かされた」と述べ、宮崎観光の父・岩切章太郎の「大地に絵を描く」という思想にも触れて「南九州には近い将来独自の前衛美術グループが発生するのではないかと思う」と、宮崎の文化への期待をにじませている。



fig.1 右から藤野忠利、白髪一雄、吉田稔郎。後ろに《FOAM-Y》

続けて同年 11 月、白髪は藤野が企画した「夜だけの現代美術展」で作品を出品している。この展覧会では、宮崎観光ホテルの中庭で吉田稔郎の《FOAM-Y》が引き続き展示されたほか、白髪以外にも吉原を含む 30 名以上の具体の作家、九州派の石橋泰幸の作品が展示された (fig.2)。この展覧会を開催するにあたり、藤野はまず白髪に相談



fig.2 「夜だけの現代美術展」展示風景

し、白髪が吉原に打診したところ、「夜だけの具体美術展はやったことがないので面白い」と話が進んだという。吉原が作品発表の場を野外や舞台に展開した先駆性は先に述べた通りだが、夜だけの美術展も「誰の真似もするな」「今までにないものをつくれ」という思想が反映されたものと言えよう。

続いて白髪が宮崎で展示されるのは、1970 年のことである。藤野が宮崎の作家と「動向美術協会」を結成、宮崎山形屋を会場に展覧会を開催し、白髪のほか具体の堀尾貞治、今井祝雄、森内敬子が賛助出品している。さらに白髪は作品の出品だけでなく、宮崎の作家たちに賛辞を送っている。その内容は、白髪が期待した南九州の前衛美術グループの門出を祝うものであり、白髪が宮崎のアートシーンに関心を寄せ、作家たちとも関わっていたことが分かる (資料 3)。この時代に、具体の作品を間近に見られ、すでに国際舞台で活躍していた白髪一雄が賛辞を送ったことが、宮崎に住む作家たちにとって大きな刺激になったこ

とは想像に難くない。

また、この頃から藤野は具体の作家の作品の販売等の紹介や仲介をするようになる。白髪作品2点を、藤野の仲介によって都城ニューグランドホテル（現在は閉業）に購入され、ホテル内に展示されることになった。この詳細な経緯は不明だが、藤野の妻・まり子の実家が都城市で潮光荘という旅館を営んでいたことが関係していると思われる。購入された作品は、《慶長拾九年（大坂冬の陣）》



fig. 3 都城ニューグランドホテルにて《慶長拾九年（大坂冬の陣）》《元和元年（大坂夏の陣）》の前に立つ藤野忠利

（1968）《元和元年（大坂夏の陣）》（1968）という扇形の大作2点で、1968年「第8回現代日本美術展」（東京都美術館ほか）に出品されたものである（fig.3）。書簡によると、他の作品も購入候補に挙がっていたが、この扇形の作品が矩形のキャンバスの作品とは異なりふさわしいだろうと白髪が提案している。また、同時期に白髪は、藤野が作品の販売など仕事を進める上で役立つようにと、1950年代に制作した裸婦デッサンを藤野に贈っている（現在は所在不明）。白髪と藤野は師弟関係を越えて、仕事を提供し合う相互的な関係へと変化していった。

多様な方法で具体を宮崎で紹介してきた藤野が次の舞台に選んだのが新聞の紙面である。1971年1月1日、西日本新聞に「あすの宮崎を考える」という元旦の特集記事が掲載された。そこでは当時の宮崎県知事の黒木博や、宮崎交通会長の岩切章太郎をはじめ県内外の著名人とともに、吉原治良のインタビューが掲載され、さらに白髪一雄、今井祝雄、吉田稔郎の作品のカットが掲載された。白髪作品は《関の孫六・剣の図》（1970頃）という刀の刀文を描いたような作品で、同時に日南海岸の白波をも思わせる。

同年、宮崎県総合博物館が開館するにあたり、宮崎での3回目の具体美術展が計画された。吉原治良は具体展の実施を希望する書簡⁴を館長の黒木淳吉宛てに送り、白髪は野外展の様子を描いた水彩画を制作した（fig.4）。いわば展覧会実施に向



fig. 4 宮崎県総合博物館での展覧会のために制作した水彩画（現代っ子センター蔵）

⁴ 書簡の原稿は現在、大阪中之島美術館に所蔵されている。

けたプレゼン資料である。しかしながら、吉原の逝去によりこの展覧会は実現していない。

1978年、宮崎で初めての白髪の個展が開催される。会場は宮崎交通を退職した藤野が1973年に設立した子どもの絵画教室「現代っ子センター」である。現代っ子センターには展示機能も備えられており、白髪は開館祝いとして《国姓爺和藤内》



fig. 5 個展初日に挨拶をする白髪一雄

(1963、姫路市立美術館蔵)を贈っている。この作品は1975年の「抽象の四人展」(兵庫県立近代美術館)の出品作の一つで、会場で藤野は白髪から「この中の好きな作品をさしあげる」と言われて選んだという。個展の開幕初日には、白髪夫妻を囲む会も開かれ、多くの人が集まり賑わった (fig.5)。このときの白髪の挨拶文と思われる直筆のメモには「宮崎とは切れぬ御縁でつながってしまったように思われ、このグループ (筆者注:藤野のほかこの展覧会の企画者たち)の一員にお加え頂きます、再会の時には新作を再び皆様にご高覧頂きたいと存じます。そして共に新しい若々しい文化の創建と発展



fig. 6 《国姓爺和藤内》の前で制作する現代っ子センターの子どもたち

に努力して参りたいと考えて居ります」とあり、どこまでも謙虚な白髪の姿勢と、宮崎の人々との交流がうかがえる。

その後も現代っ子センターには、白髪ら具体の作家たちの作品が展示され、子どもたちはそれらの作品に囲まれて絵を描くことができる絶好の制作環境であった (fig.6)。現在までに、2000人以上の子どもたちが、現代っ子センターに通っている。

藤野が子どもたちの絵画教室を開いたのには、吉原治良が子どもの無垢で豊かな想像力に魅せられ、具体が児童画に関心を寄せていたことと無関係ではないだろう。白髪は尼崎市の小学校で図工を教えていた時期もあり、型にとらわれない授業を展開したという。

続いて、1981年には現代っ子センターで「白髪一雄 現代美術の本質を語る」という個展が開催された。白髪はこのとき既に得度し、一連の修行を終えており、藤野は日南市・飢肥の天台宗寺院「常楽院」へ案内している。この寺院は盲僧琵琶の歴史を持つ寺院で、密教に傾倒した白髪にとって、天台宗の盲僧が九州の地で歩んだ歴史は興味深いものであったのだろう。この飢肥訪問には、宮崎市在住の写真家・芥川仁(1947-)も同行しており、白髪

が琵琶法師の琵琶を興味深そうに眺めたり、境内をスケッチしたりする姿が記録されている (fig.7)。そのスケッチは、当時白髪が1981年3月～1982年11月の間に「私の古寺巡拝」というタイトルで連載を手掛けていた「比叡山時報」に掲載された⁵。

他にも白髪は宮崎を訪れるたび、藤野に案内されて県内各地を訪ねていたようである。作品展示以外で訪れたのは上述の飫肥のほか、青島を訪れた記録が残っている。そのほか、詳細は定かではないが、《雲海》(1980頃)など、宮崎で見た風景をもとに制作したと思われる作品も現代っ子センターに



fig. 7 常楽院でスケッチをする白髪一雄 ©Akutagawa, Jin

遺されている (fig.8)。アクション・ペインティングの勇ましい作風と対照的に、墨で描かれた本作は一見すると抽象的な画面だが、雲海を描いた叙情的な風景画でもある。

本調査により確認できた白髪の宮崎訪問に関する記録は以上である。しかし、白髪や具体の作家たちの作品を所有していた藤野は、その後も宮崎で定期的に展覧会を開催し、宮崎の人々への発信



fig. 8 「第三章 宮崎での足跡」展示風景《雲海》(左から2番目)のほか、現代っ子センター所蔵の白髪一雄作品や関連資料を展示した

に務めた。関西から遠く離れた宮崎の地で定期的に具体の作品に触れる環境が生まれていたことは興味深い。

藤野は1991年に「宮崎アート・シンポジウム'91 “いま現代の美術はおもしろい”」、翌年に「宮崎アート・シンポジウム'92 “前衛の先駆者・瑛九を探る”」と題したシンポジウムを開催し、同時開催で具体の作家の作品展を開催している。また、1996年には開館したばかりの宮崎県立美術館県民ギャラリーで「1000人のゆかいなアーティストと藤野忠利の仕事」という展覧会を開催している。その後も毎年宮崎県立美術館や宮崎市民プラザで開催される現代っ子センターの展覧会では、子どもたちの作品とともに具体の作家の作品等を展示していた。また、1997年には藤野の義父が経営していた旅館を舞台に「潮光荘具体美術館」という展覧会も開催した。

⁵ 白髪一雄「私の古寺巡拝⑦」『比叡山時報』1981年12月8日

また、白髪は藤野とともに宮崎のみならず九州・沖縄の各地を訪問しており、1997年に大分市美術館の視察を兼ねて大分を訪れ、作品を制作している。藤野はそのときの作品とともに、作品の下に敷いたハترون紙なども大切に保管しており、作品制作のプロセスも含めて白髪に影響を受けていたことがうかがえる。このとき制作した墨絵は、1998年に開館した現代っ子ミュージアムのロゴマークに採用され、現在も使用されている。



fig.9 《不動三尊種子》(1995、現代っ子センター蔵)

晩年、白髪から藤野の手に送られたのは、《不動三尊種子》(1995)と題された作品で、蛍光ペンで描いた炎を背景に、梵字が描かれている。署名は素道。晩年は足腰を痛め、足で描くこともままならなくなった白髪だが、身近にある画材を用いて心の赴くままに描き、それを近しい人に送ったのであろう。

IV. 結び

白髪一雄の宮崎での足跡を、藤野との交流を軸に辿った。これは、白髪の主要な画歴のなかではほとんど語られてこなかったものだが、宮崎というフィルターを通して白髪一雄を見ることで、穏やかで誠実な白髪の人となりになんば近づけることができたように思う。

なお、白髪の他にも多くの具体の作家たちがたびたび宮崎を訪れ、展示やワークショップをしているが、今回の調査ではその詳細な活動歴を明らかにするに至ってはいない。宮崎と具体の関わりについては今後の調査研究の課題とする。

最後に、藤野による白髪評を載せて本稿の結びに代えたい。

アポイントメントを取ると必ず、真夏でも折り目正しい和服姿のご夫妻に迎えられつつ20年がたった。アーティストとしては勿論だが、私にとってはその精神の潔白さや、すがすがしさは、人間としても師である。⁶

⁶ 藤野忠利「足で絵を描く行為」『ペインティング入門』鈿脈社、1984年

資料1

「目を開けば 美はどこにでも」『宮崎日日新聞』1968年8月23日

美とは何か、とむずかしく考えると、いくらでもむずかしくなってくるのが美です。

それよりも美とは発見する目さえあれば、いくらでも見つけ出すことの出来るものといえます。家庭にあって日常そこらあたりをよく注意してながめてみると、思わぬところに美を発見することがあります。

今度日南海岸にあるサボテン公園にあわを吹き出す五メートル以上もある大きな塔が建てられました。これはサボテンを型どったもので、何カ所かある穴から真っ白いあわ（家庭で使われている洗剤とほぼ同じもの）が、もくもくと吹き出しているさまは異様な光景で、また面白いものです。夕日にはえ、夜間には照明に照らし出されて、だれもが美しいと感嘆します。

これは私たち具体美術協会の一員吉田稔郎の作品で、彼のあわ（フォーム）の作品はすでに有名であり、万国博の出品候補になりましたし、国の内外の展覧会で高い評価を受けています。

具体美術協会はリーダー吉原治良のもとに発足十五年近い年月、いろんな実験的な発表をして新しい美の発見に努めてきました。今まで美として取り上げられなかった現象（人間の行為をキャンバスの上に定着したり、自然現象を利用して作画する）を作品にして発表しました。

また美術を発表する場として考えられていなかった場をそれに使いました。松林の中で野外実験展をやったのが皮切りで、ステージで展覧会を公演したり、アドバルーンに絵をつり下げて空中で展覧会を開いたりしました。

舞台を使っの美の発表というのはキャンバスの上に絵の具で描くだけではあき足らず、刻々と変化する美を表現発表するの必要を感じたからです。この公演には動く抽象画とでもいえるカラーフィルムの映写もありましたが、われわれ自身の身のこなしそのものも作品として発表されました。

まっすぐ伸ばすと五メートルはある真っ赤なそでの衣装を振ると、竹のしわりでいろんな形に動く舞踊ともなんとも言えないものが私の出品作でしたし、ある作家は電灯が点滅し続けるコスチュームをつけた人間が舞台中を動き回るものを発表したのです。またある作家のは大きな煙の輪がどんどん吹き出され、青、赤、緑の照明で染め出された輪が客席の上をスースーと飛んで行く光景は見事なものでした。

観客はこのストーリーも何もない不思議な現象の連続に、ただあれよあれよと驚嘆するばかりで、最後に煙だらけの場内にいたたまれず、いぶり出されてこの公演は終わりました。

このステージでのアクションが今流行のハプニングの先駆をなしたことは有名です。

このようにいいますと、具体美術なるものは現象のみを取り上げて作品化しているように誤解されますが、けっしてそれだけではありません。各人の個性で種々様々な作品が作られつつあります。美というものはどこにでもころがっていて、目を開いて見るならば、面白い形や美しい色や不思議な現象はいくらでも見られるということなのです

資料2

「関西と九州 具体美術と九州」『九州芸術』(1968)

私がかねがね南九州は大阪と縁の深いところだと思っている。ずい分昔から船をたよりに大阪方面と直接つながっていた。そして今ではジェット機に乗ってアツというまに行き来できる。今年の夏宮崎県日南海岸のサボテン公園に建てられた奇妙なサボテン形の巨大な塔は、南九州でテレビ放送や新聞を通じて紹介されたが、それは洗剤の泡をもくもく吹き出してその異様な光景に見る人達は驚かされた。これのセッティングとテレビ出演のために出品者の吉田稔郎と私は飛行機で宮崎へ飛んだ。宮崎の清澄な空気はスモッグにおおわれた大阪のとは比較しようもないほどうまかったし、南国の植物が繁茂して異国情緒をかもし出してはいたが、日本の南端近くまでやって来たという実感が起こらなかった。その都会的のムードと文化水準の高い様子に驚かされた。宮崎にはわれわれ具体グループに所属して前衛的な作品を作っている藤野忠利君がいて、彼を生んだ宮崎という土地の文化の高さをうすうす感じてはいたけれどもこんなにまでとは思わなかった。聞けば宮崎交通の会長岩切章太郎氏は、宮崎を自然のキャンバスに見立てて“大地に絵を描く”ことを理想とせられ美術家の魂をもって宮崎の観光を開発されたというが、たぶんその成果をうかがい得た。町は明るく清潔でクールな感じに統一されていて、その風土は現代人の夢を充たしてくれる。その清潔さは扇風機の風ではなくエヤコントロールされた現代的な爽風である。美術の面では福岡に九州派が生まれたが南九州には近い将来独自の前衛美術グループが発生するのではないかと思う。(後略)

資料3

「動向美術協会の発足にあたって」『動向美術協会展』宮崎山形屋、1970年7月21日-26

日

新しい南国の宮崎に新しいグループが生まれた。

彼らは何をしようとしてそれを結成したのだろうか。より前向きの姿勢で歩みつづけるのに、お互にはげましあえるからであろう。

私は北九州には早くから前衛的なグループがあることと、その活躍を知っていた。

しかし太陽の国宮崎にはそのきざしはあっても実体のないことに失望しながら突然訪れたこの地を去った。それから二年、私の期待したグループは巣立った。

今年も南国の七月は生繁る植物のむんむんする熱気で満ちあふれていることだろう。

この風土の特質と同じように、彼らの建設的な創造が膨大なものに成長することを、大阪の地で私は祈っている。

白髪一雄の宮崎での足跡 年譜

年代	年齢	主な出来事
1962年	38歳	11月、グタイピナコテカにて個展を開催。藤野忠利と出会う。
1968年	44歳	7月、宮崎県日南市・サポテン公園にて吉田稔郎《FOAM-Y》の設置のため、初めて宮崎を訪れる。
		11月、「夜だけの現代美術展」(宮崎観光ホテル)に出品。
1970	46歳	都城ニューグランドホテルに《慶長拾九年(大阪夏の陣)》(1968)《元和元年(大阪冬の陣)》(1968)が飾られる。
1971	47歳	1月、西日本新聞の元旦の特集記事「あすの宮崎を考える」に具体の作家とともに《関の孫六・剣の国》のカットが掲載される。
1978	54歳	6月、現代っ子センターで個展開催。《国姓爺 和藤内》(1963、姫路市立美術館蔵)を贈る。初日に「白髪一雄・白髪富士子ご夫妻を囲む会」が催される。
1981	57歳	11月、「白髪一雄 現代美術の本質を語る展」(現代っ子センター)に合わせて来宮。日南市飢肥などを訪ねる。
1996	72歳	1月、「1000人のゆかいなアーティストと藤野忠利の仕事展」(宮崎県立美術館 県民ギャラリー)
1997	73歳	大分・由布院を訪れ、旅館「玉の湯」で制作する。

1998	74 歳	6 月、「宮崎現代っ子センター25 周年記念展 白髪一雄展」(宮崎県立美術館 県民ギャラリー)
1999 年	75 歳	9 月～11 月、「現代っ子ミュージアム オープン展—グタイとこども・藤野忠利の仕事」に出品。
2002 年	78 歳	10 月～11 月、「日本の前衛芸術 GUTAI」(現代っ子センター)

主な参考文献

『白髪一雄展—格闘から生まれた絵画』白髪一雄展実行委員会、2009

『白髪一雄』公益財団法人東京オペラシティ文化財団、2020

平井章一編著『「具体」ってなんだ？結成 50 周年の前衛美術グループ 18 年の記録』美術出版社、2004

藤野忠利著『ペインティング入門』鉦脈社、1984

藤野忠利著『もうひとつの具体』鉦脈社、2011

藤野忠利著『gutai faces』鉦脈社、2018

妹尾綾「白髪一雄と尼崎」『尼崎市立地域研究史料館紀要 地域史研究』第 114 号、2014

白髪一雄「目を開けば美はどこにでも」『宮崎日日新聞』1968 年 8 月 23 日

白髪一雄「私の古寺巡拝⑦」『比叡山時報』1981 年 12 月 8 日

「あすの宮崎を考える」『西日本新聞』1971 年 1 月 1 日

白髪一雄オーラル・ヒストリー、加藤瑞穂と池上裕子によるインタビュー、2007 年 8 月 23 日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

〈https://oralarthistory.org/archives/shiraga_kazuo/interview_01.php〉（最終閲覧 2022 年 12 月 9 日）

白髪一雄オーラル・ヒストリー、加藤瑞穂と池上裕子によるインタビュー、2007 年 9 月 6 日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ

〈https://oralarthistory.org/archives/shiraga_kazuo/interview_02.php〉（最終閲覧 2022 年 12 月 9 日）

謝辞

特別展「白髪一雄 一行為にこそ絵てをかけて—」の開催及び本論の執筆にあたり、ご遺族の白髪久雄氏、白髪博子氏、白髪里香氏、現代っ子センターの藤野カオリ氏、藤野ア子氏、尼崎市役所の松長昌男氏、金子松美香氏、公益財団法人尼崎市文化芸術振興財団の妹尾綾氏に多大なご尽力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。